

Title	19世紀中葉・アメリカ東部の農村構造：ニューヨーク州セネカ郡
Sub Title	Farm economy in New York in the 19th century
Author	岡田, 泰男(Okada, Yasuo)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2001
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.4 (2001. 1) ,p.721(51)- 749(79)
JaLC DOI	10.14991/001.20010101-0051
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20010101-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19世紀中葉・アメリカ東部の農村構造

— ニューヨーク州セネカ郡 —

岡 田 泰 男

はじめに

19世紀前半から中葉にかけてのアメリカ東部、より正確には北東部の農村と農業についてのイメージは、近年の研究の進展により大きく変化した。かつては、北東部の農業は、南部の綿花生産に比べると、自給自足ではないにせよ商業的色彩は薄く、完全に市場向生産であるとはいえない、と考えられていた。しかし、農村に関しては、奴隷制プランテーションが支配的であった南部とは異なり、北東部は民主的で近代的であるというのが、一般的解釈であったと思われる。北東部においては、小規模で家族労働力に頼る家族農場が多かったし、初期には交通の便も悪かったので、市場との接触が限られているのは当然とされていた。けれども交通機関の発達につれて、商業的傾向が強まることは、ビドウェルとファルコナーの古典的な『北部農業史』（1925年）の強調するところであつた。⁽¹⁾

アメリカ北東部の農民が、交通手段の便さえ与えられれば、商業的農業を始めるという考え方の背景には、ひとつの暗黙の前提がおかれていた。それは、アメリカの農民は、本来、市場指向的であつたというもので、資本主義は「メイフラワー号と共に」アメリカにやってきた、とまでは言わなくとも、封建制の下にあったヨーロッパとは、植民の最初から事情が異なつていたという見方である。こうした素朴な見方は、1960年代以降、昔風の農業史ではなく、農村社会の構造に焦点を合わせた個別研究が多数なされる中で、変更をせまられたが、とくに、上に記した前提を否定するような研究が多く出されたことが重要であつた。それらの中で、とりわけ影響力が大きかつたのはジェイムズ・ヘンレッタの「家族と農場・工業化以前のアメリカにおけるマンタリテ」（1978年）という論文であつた。植民地時代のボストンの富の分配について、優れた計量経済史的研究をしたヘン

(1) Percy W. Bidwell and John I. Falconer, *History of Agriculture in the Northern United States, 1620-1860* (Washington, D.C., 1925).

レットは、ここでは、むしろ社会史的立場から、アメリカの農民が市場よりは家や土地を重視していたことを示した。クリストファー・クラークのマサチューセッツ農村における資本主義の成立を扱った研究も、この立場を受けついでいる。⁽²⁾

他方、農民の市場指向性を重視する研究も多い。ジェイムズ・レモンの『貧者にとって最良の土地』(1972年)はペンシルヴァニアの農民を対象としていたが、植民地時代の移民を、家族や共同体のしがらみよりは、個人の自由や物質的利益を重んずる人びととみなした。そして、『市場町から市場経済へ』(1992年)と題して、マサチューセッツを扱ったウィニフレッド・ローゼンバーグは、すでに独立以前から市場の支配、もしくは市場経済の発展が見られたことを主張した。どちらかといえば旧世代のクラレンス・ダンホフが1969年に出版した概説書『農業の変化』は、1820年から1870年までの北部農業を対象としていたが、この半世紀の間に、北部の農民は家族から市場へと、その方向を転換させたと述べていた。そして1979年に発表した「農家企業 (Farm Enterprise)」という論文で、個別経営の分析をおこなった。⁽³⁾

ある歴史家は、ローゼンバーグのような見方を「市場的」解釈、ヘンレット等のそれを「社会的」解釈と名付けた。たしかに両者は対立的にとらえることもできるが、実際の研究の内容を見てみると、実は重なり合う部分も多い。現に、農家を企業としてとらえたダンホフも、農民の中には伝統的な自給農業に執着していた者が多かったことを認めている。さらに「市場」派の先端を行くジェレミイ・アタックとフレッド・ベートマンの共著『彼ら自身の土地』を読めば、この点は明らかである。1860年の北部農村のマニユクリプト・センサスを史料とした、その計量的研究において、農業が市場指向的傾向を強めていることは明らかだが、家族農場には「生き方 (a way of life)」としての面も強く残っているという二面性が強調されている。「19世紀のアメリカ農業は、他産業とは違って、経済学的分析だけでは分からないところがある」と共著者は述べている。⁽⁴⁾

さて、筆者は以前から、西漸運動の移住者を供給する側としての東部農村に興味を持ってきたが、近年の研究の盛況にさそわれ、もう一度、19世紀中葉のニューヨーク農村を訪れることとした。な

(2) James A. Henretta, "Families and Farms: *Mentalité* in Preindustrial America," *William and Mary Quarterly* 3rd ser. 35 (1978): 3-32; Christopher Clark, *The Roots of Rural Capitalism: Western Massachusetts, 1780-1860* (Ithaca, 1990).

(3) James T. Lemon, *The Best Poor Man's Country: A Geographical Study of Early Southeastern Pennsylvania* (Baltimore, 1972); Winifred B. Rothenberg, *From Market-Places to a Market Economy: The Transformation of Rural Massachusetts, 1750-1850* (Chicago, 1992); Clarence H. Danhof, *Change in Agriculture: The Northern United States, 1820-1870* (Cambridge, Mass., 1969); Danhof, "The Farm Enterprise: The Northern United States, 1820-1860s," *Research in Economic History* 4 (1979): 127-191.

(4) Christopher Clark, "Economics and Culture: Opening Up the Rural History of the Early American Northeast," *American Quarterly* 43 (1991): 279-301; Jeremy Atack and Fred Bateman, *To Their Own Soil: Agriculture in the Antebellum North* (Ames, Iowa, 1987). 引用は p.12 より。

お「北東部」でなく「東部」としたのは、南北戦争前のアメリカを、東部、西部、南部の三地域に分ける慣例に従ったものである。ニューヨーク農業については、古くから多くの研究があるが、最近ではドナルド・パーカーソン『ニューヨーク州における農業の転換』（1995年）や、サリー・マクマレー『農村生活の変容』（1995年）がある。前者はアタックとベートマンと同様、マニユスクリプト・センサスを史料とした計量的研究であって、農民を「伝統的ヨーマン」と「市場指向的農民」に分け、後者が優勢になってゆく状況を追っているが、家族構成のあり方や、農業における女性の役割とその後退（農業の男性化）などの問題も扱っている。マクマレーの書物は酪農業、とくにオネイダ郡のそれを扱い、酪農業における工場制（チーズ生産）の進展を、家族や女性の役割の変化と共に述べている。前者は「市場」派、後者は「社会」派と分類することも可能であるが、分析方法の相違はともかく、市場、家族、女性などが主題である点、とくに区別する必要はない。本稿では、ニューヨーク州中央西部にあるセネカ（Seneca）郡のあるタウンシップをとりあげ、その人口、職業、家族構成などを検討する。⁽⁵⁾

1. セネカ郡ロダイ

セネカ郡は図1に示すように、ニューヨーク州の中央から少し西側によった地域に存在する。図には示されていないが、西側はセネカ湖、東側はカユガ湖という二つの湖水にかこまれている。19世紀中葉、郡の北側にはニューヨーク・セントラル鉄道が通り、エリー運河も通っているので、交通の便には恵まれている。セネカ湖は不凍湖であるので、冬にも運送に利用できる。土地は一般的に肥沃で穀物生産に適し、1850年には小麦、オート麦、トウモロコシなどが主要産物である。前述のパーカーソンは、19世紀中葉のニューヨーク州の諸郡を人口の移出入の観点から、成長（ダイナミック）、安定、限界的（マージナル）という三つに区分した。地域的にはエリー運河ぞい成長グループ、ハドソン川ぞいの古くから定住の進んだ諸郡は安定的、州の北部や、南西部の山地は限界的な郡が多い。セネカ郡は、パーカーソンのサンプルには入っていないが、近隣のオノンデイガ、オンタリオなどは成長グループであるので、その中に含まれると思われる。

いく分、角度を変えて、農場価値（農地および建物）という点から、セネカ郡がニューヨーク州の中で、どんな位置をしめしているかを見よう。エーカーあたりの平均農場価値で、ニューヨーク

(5) Donald H. Parkerson, *The Agricultural Transition in New York State: Markets and Migration in Mid-Nineteenth-Century America* (Ames, Iowa, 1995); Sally McMurry, *Transforming Rural Life: Dairying Families and Agricultural Change, 1820-1885* (Baltimore, 1995).

表1 ニューヨーク州の諸郡のランク
(エーカーあたり農場価値による)

	1850年	1860年
I (~20ドル)	15郡	7郡
II (21~30)	17	12
III (31~40)	12	13
IV (41~50)	7	13
V (50~)	8	15
計	59	60

<出所> Pressly and Scofield, *Farm Real Estate Values*, pp.24-25.

の諸郡を5グループに分けると表1のようになる。最も低いIグループ(20ドル以下)から、最も高いVグループ(51ドル以上)までの郡の数の分布を示しているが、1850年と1860年とで合計の数が異なるのは、この間に新しい郡が一つ加わったためである。州全体としての平均は1850年が29ドル、1860年が38ドルであるが、セネカ郡は、1850年に51ドル、1860年に59ドルであって、いずれも最高位のVグループに入っている。このグループに含まれるのは、1850年にはダッチェス、キング、モンロー、ニューヨーク、クイーンズ、リッチモンド、セネカ、ウェストチェスターの8郡、1860年には、それに加え、カユガ、コロンビア、オノンデイガ、オレンジ、プトナム、レンセラー、ロックランドの計15郡である。大都市周辺地域が多いが、そうした中に、セネカ郡やモンロー郡のようなエリー運河ぞいの農業中心の郡が入っていることが目立つ。ともあれ、セネカ郡が、最も豊かな農業地域の一郡であったことは明らかであろう。⁽⁶⁾

さて、本稿でとり上げるのは、セネカ郡全体ではなく、その中のロダイ(Lodi)というタウンシップである。ロダイを中心とする理由は、かつて、ここに住むフィリップ・ロットという農民の勘定帳を分析したことがあるため、その際には単なる背景として扱った農村全体に目を向けたいと思う。⁽⁷⁾セネカ郡には、1850年に10のタウンシップがあり、その中には「女性の権利宣言」(1848年)で名高いセネカ・フォールズも存在した。セネカ郡は全体として農業的な郡ではあるが、郡の北部、ニューヨーク・セントラル鉄道に近いセネカ・フォールズやウォータールーでは工業生産もおこなわれ、ポンプ、消火用ポンプ、機械類が製造された。ウォータールーの羊毛工場は1836年に創設されたが、ショールの生産が専門で200人から250人を雇い、年30万ポンドの羊毛を使用し、4万本のショールを生産した。これらに比べ、郡の南部にあるロダイは、製粉場はあるものの農業中心といえる。⁽⁸⁾

(6) Thomas J. Pressly and William E. Scofield, eds., *Farm Real Estate Values in the United States by Counties, 1850-1959* (Seattle, 1965).

(7) 岡田泰男「19世紀アメリカ東部農民の生産と消費——ニューヨーク州の一農場の場合——」『三田学会雑誌』75-3 (1982): 152-168。

(8) J. H. French, *Gazetteer of the State of New York* (Syracuse, 1860), 613-618.

1850年、セネカ郡全体の人口は約25,000、農場数は約1,600であったが、ロダイの人口は2,269、農場が201である。郡全体の農地面積は約17万エーカー、その内、13万エーカーが既墾地で、既墾地率は76%であった。ロダイの農地は20,938エーカー、既墾地16,390エーカー（78.3%）である。郡全体の小麦生産高は約53万ブッシェル（農場あたり334ブッシェル）、オート麦は約32万ブッシェル（農場あたり204）、トウモロコシは約28万ブッシェル（農場あたり178）となっているが、ロダイは、10のタウンシップ中、小麦生産高は2位（計76,827 農場あたり392）、オート麦は5位（計30,909 農場あたり173）、トウモロコシは7位（計20,909 農場あたり114）となっており、小麦の比重が高い。その他、大麦、ソバ、ライ麦、乾草、ジャガイモ、バター、チーズ、羊毛などが生産されているが、ロダイは、タウンシップの中で、乾草、バターは2位、羊毛は3位で、農場あたりの、それぞれの生産高は、乾草18.2トン、バター315ポンド、羊毛101ポンドであった。これは郡平均とほぼ同じである。⁽⁹⁾

セネカ郡の農民が、どの程度、市場指向的であったかという点について、1850年のニューヨーク州農業協会の年報に、興味深い文章がのっている。これは、ジョン・デラフィールドの「セネカ郡の概況と農業」の一節で、酪農にふれた部分であるが、まず「ほとんどの農家での酪農の生産は自給用に限られている」とし、年々のバター生産量は郡全体で約55万ポンド、チーズは2万ポンド以下なので、郡の人口25,000で割ると、一人あたり、バターは22ポンド、チーズは1ポンド以下にしかない。「したがって、市場への供給量は少ない」と記す。しかし、「絶えず沈黙のうちに、この農業部門に対して働く需要と供給の力は、この2年間のうちに郡の牧草地や採草地を増加させた」という。そして、「近隣の郡で、酪農業が利益を上げている事実が、改善への大きな刺激になっている」と述べている。別の箇所では、郡内にある製粉場では、574,000ブッシェルの小麦が製粉され、140,575樽の小麦粉が生産されているが、この量は郡の小麦総生産量より大きいことが指摘されている。また、郡内の羊毛工業は「年々、325,000ポンドの羊毛を消費するが、これは郡の羊毛生産量の倍以上である」と記されている。「郡内の製粉場や工場が、農民の小麦や羊毛の価値に直接、影響を与えるというわけではない」とはしながらも、それが有利な影響を与えることを述べている。この筆者の目からすれば、市場の影響力は大きいのに、農民の反応はいま一歩というところであろうか。⁽¹⁰⁾

(9) U. S. Census (Manuscript Schedules), Population, 1850 ; Agriculture, 1850, Seneca County, N. Y.

(10) John Delafield, "General View and Agricultural Survey of County of Seneca," *Transactions of the New York State Agricultural Society* 10 (1850) ; 423, 543.

2. ロダイの人口と住民の職業

本節以下、ロダイの分析に移るが、まず人口の変化を見ることにする。表2は1830年から1880年までのロダイの人口、世帯数および平均世帯規模を、連邦マニユスクリプト・センサスから集計したものである。なお、世帯 (Household) という言葉は、史料では用いられていない。1830年と1840年のセンサスは、家長 (Head of family) の氏名と、その家長の名の下に、年齢区分別に (5歳以下, 5歳~10歳, 10歳~15歳等々), 男性何名, 女性何名と記入されている。1850年以降は、家屋 (Dwelling house) と家族 (Family) の番号順に、家族全員の氏名, 年齢, 性別, 職業, 財産の額, 出生地等が記録されている。もっとも、ここでの家族は、血のつながりのある者という意味ではなく、同じ家屋に住む者が、通常は家族として扱われている。例えば、フィリップ・ロット (41歳男) の家族には、エリザベス (35歳女), エライヤ (11歳男), スカイラー (7歳男), キャサリン (3歳女) というロット姓の者に加え、エレナー・ディーン (17歳女), さらにリッチモンド・コヴァート (25歳男) 以下, プルシラ (28歳女), アネッタ (10歳女), ウォレン (3歳男) という4名のコヴァート姓の者が含まれている。フィリップ・ロットの職業は農民, リッチモンド・コヴァートは労働者となっているので、後者は家族持ちの住み込み労働者かもしれないが、センサス上は同じ番号のロットの家族に含まれてしまっている。したがって、家族のかわりに世帯という言葉を使うこととした。⁽¹¹⁾

表2に、19世紀半ばの半世紀にわたる人口の変化が示されているが、1830年から1850年までは増加が続き、その後はいく分減少気味である。もっとも1880年には再び増加しているので、2,000人前後で、ほぼ安定したと考えてもよいであろう。一方、世帯数は、1850年まで増加し、その後は安定し、1880年に再び増えている。変化の傾向が一番はっきりしているのは、世帯あたりの人数であって、1830年の5.9人が最大で、以下10年毎に減少を続け、1880年には4.1人になっている。もっとも、

表2 ロダイの人口と世帯

年度	人口	世帯数	平均世帯規模
1830	1,786	303	5.9(人)
1840	2,236	388	5.8
1850	2,269	427	5.3
1860	2,067	428	4.8
1870	1,825	425	4.3
1880	1,942	474	4.1

(11) 本稿の史料はすべて U. S. Censuses (Manuscript Schedules), 1830-1880, Seneca County, N. Y. の Lodi の部分であるので、特に必要な場合を除き、注記しない。表も、すべて上記史料から作成したものであるため、いちいち出所を記すことを略す。

1830年の5.9人はそれほど大きいわけではないし、これを単純に大家族から小家族へ、あるいは核家族化の反映と解釈することはできない。世帯および家族の構成については、後に詳しく述べる。

さて、本稿では1850年と60年のロダイを中心に分析する。これは人口増加が、ほぼ高原状態に達した時期であるが、もちろん、このタウンシップの人口変化のみから、この年度を選んだわけではない。先に記したアタックとベートマンの研究やパーカーソンの研究が、やはりこの時期を対象にしているのも、ほぼ同じ理由による。すなわち、南北戦争後の工業化や都市化が進展した時代に比べ、19世紀中葉は、ポール・ゲイツの概説書の題名でもある「農民の時代」の絶頂期にあたること、それと同時に市場指向への変化が明らかになる転換期でもあったことによる。⁽¹²⁾

まず、1850年と60年の世帯主の職業を表3に示そう。世帯主とは、センサスにおいて家族の筆頭に記されている者で、通常は男性であり、職業、財産額が記されている。当時のアメリカでは家長(Head of a family)という言葉の方が一般的であるが、すでに記した理由により、世帯主という言葉を使う。表3を見れば明らかなように、19世紀中葉のロダイは農村とはいえ、非農業人口も多い。農民の比率は、1850年には50%に達せず、1860年に50%強という程度である。労働者をすべて農業労働者と考えれば、農業従事者は70%から75%となるが、この仮定が正しいかどうかは分らない。非農業人口の中で多いのは手工業者もしくは職人であり、鍛冶屋、大工、靴職人など多くの職種が含まれる。両年度とも16~17%がこれにあたる。次に専門職と商人・運送業従事者が存在するが、前者には医者、弁護士、教師、牧師などが含まれ、後者には商人、旅館、馬車屋などがある。この両者を合わせて、5~6%にあたる。残りは無職であるが、これは女性が世帯主である場合が多い。⁽¹³⁾ 1850年の31名中27名は女性であった。

ここで、農民、労働者以外の職業について、もう少し詳しく見ておこう。1850年に、専門職として存在したのは医者6名、牧師4名、弁護士1名、教師1名であるが、実はロダイには他に医者2名、弁護士1名、教師8名、そして画家が1名存在した。これは世帯主以外の専門職の者であって、

表3 ロダイの世帯主職業

	1850	1860
農 民	196 (45.9%)	222 (51.9%)
労働者	103 (24.1)	101 (23.6)
専門職	12 (2.8)	13 (3.0)
商 業	12 (2.8)	15 (3.5)
手工業	73 (17.1)	67 (15.7)
無 職	31 (7.3)	10 (2.3)
計	427 (100.0)	428 (100.0)

(12) Paul W. Gates, *The Farmer's Age : Agriculture, 1815-1860* (New York, 1960).

(13) 職業の分類については、例えば次を参照。Michael B. Katz, *The People of Hamilton, Canada West : Family and Class in a Mid-Nineteenth-Century City* (Cambridge, Mass., 1975).

彼等については後に述べるが、人口2,000程度の村であるから、医者や教師が不足したとはいえないであろう。なお、教会はメソヂスト派など、5つの教会があったから、ひとつの教会には専任の牧師は存在しなかったものと思われる。1860年になると牧師は5名（1名は非世帯主）となっている。一方、医者は5名に減少している。

次に商業では商人5名、食料品商1名、宿屋、馬車屋、水夫各1名、店員3名となっているが、商人、水夫、店員には非世帯主の者が16名、郵便配達2名が加わる。1860年になると、倉庫業者、家畜取引商、特許売薬商など、新しい職種の方が加わるが、全体としての数には、あまり変化はない。もちろん、農民と市場との関係という点で、商人のしめる位置は極めて大きい、もう少し角度を変え、農民が、農民以外のどのような職業の人びとと接触を持ったかを知るためには、手工業者もしくは職人について検討する必要がある。

1850年にロダイの手工業者で最も多かったのは大工の19名（他に非世帯主7名）であり、次に靴職人15名（他に3名）、鍛冶屋7名（他に2名）となる。おけ屋（たる製造）、水車屋（製粉業者）、仕立屋は5名ずつ存在し、荷馬車製造、皮なめし屋、石工が各3名いる。その他、馬具屋、馬車製造、機械工、機関手、家具屋、ペンキ屋、建築屋が1～2名ずつ存在した。農民は家屋や納屋の建築を大工に頼み、靴を靴職人に作ってもらい、鍛冶屋に馬の蹄鉄から農機具など、さまざまな鉄製品を頼んだ。おけやたるは、小麦粉、塩づけ豚肉、サイダー（りんご酒）、バターなどの保存から、メイプル・シロップ採取用のおけ、牛乳しぼりのおけなど、きわめて用途が広いが、おけ職人から購入した。衣服は、この時代になるとホームスパンはまれであるが、その仕立は仕立屋の仕事であった。さらに、前記の靴職人は皮なめし屋から原料を仕入れ、馬車屋は鍛冶屋に仕事を依頼するという具合に、職人も相互に依存関係にあった。

1860年になっても、大工14名（他に2名）、靴職人12名、鍛冶屋6名（他に2名）、おけ屋、馬車製造、各5名、水車屋4名等、職種や人数はあまり変化しない。世帯主の職人の数は1850年の73名から67名へ減少しているが、非世帯主も加えると、1850年は102名、1860年は104名でむしろ増えている。新しい職種としては、仕立屋に加え婦人服仕立屋、婦人帽子屋、椅子製造、織工、お針子などがあり、消費の多様化をうかがわせる。他に製材所が作られ、材木屋と製材工とが存在するようになった。このように、さまざまな手工業者が存在することで、ロダイの住民は、別の町へ出かけなくとも、一応、必要な品物やサービスを得ることが可能であったと思われる。また手工業者は、農閑期には労働者へ雇用を提供したであろう。すでに記したようにウォータールーやセネカ・フォールズには鉄道が来ており、ロダイとこれらの町は20マイル程しか離れていない。またセネカ湖は1年中、湖上交通が可能であるが、ロダイの住民は、とりあえず彼らの村の中で、特に不自由なく暮してゆくことができた。

一方、農民の側の生産量は、ロダイの住民を養うのに十分であったか、という問題がある。当時の1人あたり食料消費量については、いろいろな推計があるが、年間、小麦12～13ブッシェル、肉

200ポンド、バター15ポンドという数字が、ほぼ妥当なものであろう。ロダイの1850年の住民は約2,200人であるから、小麦28,600ブッシェル、肉440,000ポンド、バター33,000ポンドが必要最大限と見てよい。住民には幼児も含まれており、上記の消費量は成人のものだからである。同年、ロダイの小麦生産量は約77,000ブッシェル、バターは約60,000ポンドである。肉の生産量は不明であり、屠殺された家畜の価値が約13,000ドルということであるが、これが何ポンドにあたるかは分からない。当時、食用となるのは主に豚肉であり、市場へ出される豚は、通常1頭200~300ポンドの重量であった。したがって、大人は年間に、ほぼ1頭分の豚肉を消費したことになる。1850年のロダイにおける豚の頭数は1,000頭弱であるので、十分需要に応じられたか否かは不明である。もっとも小麦とバターは十分余裕があり、外部へ販売されたに相違ない。⁽¹⁴⁾

なお、住民の職業は人口センサスに記入されたものであるが、これを同じ年の農業センサスと比較すると、農民でありながら農場の記入がない者、逆に農民以外で農場を持っている者も存在した。いわゆる「農場なき農民」は小作農とは異なる。というのは農業生産をおこなっていれば、農業センサスに記入されるからである。ただし、年間生産額100ドル以下の場合には記入されないの、ごく小規模な農場経営の場合、職業は農民であっても、農業センサスにのらないことになる。また、職業は自己申告によるので、本当は農業労働者であったり、まだ農場を持っていないのに農民と称した場合もあったであろう。1850年のロダイで、人口センサスには農民とありながら、農業センサスに記載のない11名について見ると、そのうち不動産を所有する者6名、しない者5名であり、年齢分布は20歳代2名、30歳代5名、40歳代1名、50歳代3名であって、年長者は引退した農民と考えることもできる。これら11名のうち、1860年にもロダイに居住していたのは2名のみで、1人は農業労働者、1人は靴職人になっていた。⁽¹⁵⁾

他方、人口センサスでは農業以外の職業についていながら、農場経営をしていた者も存在する。労働者の中にはいないが、専門職1、商業3、手工業4、無職3という数字である。例えば医師のパトリック・フラッドは95エーカーの農場(価値3,500ドル)を経営し、小麦350ブッシェル、オート麦400ブッシェル、大麦250ブッシェル、バター500ポンド、乾草50トン等を生産した。大江のアイザック・コヴァートは、26エーカーの小農場(1,500ドル)ではあるが、小麦75ブッシェル、トウモロコシ100ブッシェル、オート麦40ブッシェルを作り、バター175ポンド、乾草6トンも生産した。商人のギルバート・ギャノンも35エーカーの小農場(2,500ドル)で穀物は生産していなかったものの、乳牛3頭を所有して、バター400ポンドを生産し、9頭の羊を飼育して羊毛27ポンドを得てい

(14) 1人あたり消費量については、Attack and Bateman, *To Their Own Soil*, 209.

(15) 農場なき農民については次を見よ。Allan G. Bogue, *From Prairie to Corn Belt: Farming on the Illinois and Iowa Prairies in the Nineteenth Century* (Chicago, 1963), 64; Seddie Cogswell, Jr., *Tenure, Nativity and Age as Factors in Iowa Agriculture, 1850-1880* (Ames, Iowa, 1975), 7; Attack and Bateman, *To Their Own Soil*, 44-45.

た。また無職で47歳の女性エリザベス・ホルシーは、50エーカーの農場（5,000ドル）を経営し、馬6頭、乳牛2頭、羊10頭を飼育、小麦200ブッシェル、トウモロコシ75ブッシェル、オート麦30ブッシェル、羊毛40ポンド、バター150ポンド、乾草49トンの生産をしていた。これらの例のうち、医師のフラッドは多分、労働者を雇って農場を経営し、大工のコヴァートと商人のギャノンの仕事の合い間に、そして未亡人のホルシーは同居していた28歳の息子に農場をまかせていたのであろう。以上、農場なき農民にせよ、農場経営をおこなう農民以外の者にせよ、それぞれの5%程度であり、あまり多くない。農業と非農業との分離は、もうかなり、はっきりしたものだといえる。

3. 世帯主と非世帯主

世帯主の職業について述べた際、非世帯主についてもふれたが、ここで非世帯主のうち職業を持っているもの、すなわち人口センサスに職業が記入されている者について、まとめておこう。表4は、1850年と60年の非世帯主の職業である。表3と比較すれば明らかなように、非世帯主には農民は少なく、労働者が多い。さらに世帯主の場合には存在しない家事労働者が、とくに1860年に多数存在している。専門職や商業で、非世帯主の割合の方が高いのは、専門職では教員、商業では店員や水夫が多いためである。手工業者の場合、その割合が世帯主よりも低いのは、助手や徒弟が職業を労働者と報告したためかもしれない。たとえば、商人のマイケル・エリソンの息子フランシスの職業は店員だが、靴職人のアイザック・ブラカウの息子コーネリウスは労働者、大工のデヴィッド・ホールトンの家にいたジョージ・フーフースも労働者となっている。もっとも非世帯主の大工は7名、おけ屋は5名、靴職人も3名存在した。なお、非世帯主の場合、職業のない者は表4には含まれていない。

1850年と1860年を比べて目立つ点は、労働者が実数、割合ともに減少し、家事労働者は逆に増加していることである。かりに後者を前者に含めてしまうと、1850年に188名（67.6%）、1860年に192名（73.3%）とほとんど差がなくなるので、上記の変化はセンサスの記入方法によるかのように見える。しかし、労働者とあるのは、すべて男性、家事労働者は全員女性であるので、1850年の

表4 ロダイの非世帯主職業

	1850	1860
農 民	31 (11.2%)	13 (5.0%)
勞 働 者	177 (63.6)	117 (44.7)
専 門 職	12 (4.3)	9 (3.4)
商 業	18 (6.5)	13 (5.0)
手 工 業	29 (10.4)	35 (13.3)
家事労働者	11 (4.0)	75 (28.6)
計	278 (100.0)	262 (100.0)

労働者の中に家事労働者が含まれていることはない。ただし、1850年には、実際には家事労働者でありながら、職業欄にそう記入されていなかった者が、かなり存在していたように見える。例えば、フィリップ・ロットの家は妻と11歳、7歳、3歳の子供の次に、エレナー・ディーンという17歳の女性が記されているが、職業は記入がない。彼女は家事奉公人であった可能性が高い。商人のギルバート・ギャノンの家族は妻と、19歳、16歳、11歳、1歳の子供の他にエリザベス・パウエルという18歳の女性が存在するが、彼女の職業も無記入である。

1850年のロダイには427世帯があり、その内169世帯には世帯主と姓の異なる同居者が存在した。これら同居者の総数は314名で、男性187名、女性127名である。男性のうち職業のある者131名(70.1%)に対し、女性は13名(10.2%)にすぎない。女性の中で、15歳～29歳の者が57名存在するが、その中で48名は無職になっている。また14歳以下では43名(無職41名)、30歳～49歳の12名は全員無職である。多分、この中には実際は家事労働者だった者が含まれていたはずであり、1860年になって急に家事労働者が増加したわけではなかろう。幼い子供のいる家や、農繁期に労働者を雇う家では、家事奉公人への需要は高かったからである。⁽¹⁶⁾

次に非世帯主である労働者の減少についてはどうか。これは家事労働者の場合と異なり、職業欄の記入もれによるものではない。1850年、非世帯主の労働者177名中、世帯主と姓が同じ者(子供又は親類)は93名、異なる姓の者が84名であった。しかし、1860年になると、世帯主と同じ姓の者がいちおしく減少する。総計117名中、同姓は21名、異なる姓は96名である。一般的に、親または親類の家に同居しつつ職業を持つ者が減少しており、1850年に、職業を持つ非世帯主278名中、141名(50.7%)をしめていたのに、1860年には262名中、52名(19.8%)にすぎない。もちろん、この中には、独立して世帯主となった者も存在する。1850年には非世帯主だが、1860年、独立した世帯主として同村に居住する者は50名おり、彼らの職業は農民32、労働者11、専門職1、商業2、手工業4であった。これら独立した若者(もちろん、正しくは若くない者も含まれている)を考慮に入れても、上記の減少傾向は否定できない。

世帯主の立場からすれば、とくに農民の場合、世帯の中に働ける者が存在することは有利であるから、上の傾向は彼らが望んだものとはいえない。むしろ非世帯主の側が、ロダイを出て働くことを望み、またその機会も1850年から60年にかけて拡大したと考えるべきであろう。ロダイの世帯数が、この10年間にほとんど変化しなかった(427と428)にもかかわらず、職業を持つ非世帯主が278名から262名へ減少し、人口も2,259から2,067へ減少した背景には、村外での機会の拡大ということがあったかもしれない。世帯主の年齢については後に述べるが、1850年、29歳以下の世帯主が

(16) 農業労働者や家事奉公人については次を参照。David E. Schob, *Hired Hands and Plowboys: Farm Labor in the Midwest, 1815-60* (Urbana, Ill., 1975); Clark, *Roots of Rural Capitalism*, 304-309.

76名(17.8%)であったのに、1860年には62名(14.5%)と減少していることも、上の傾向に歩調を合わせていた。⁽¹⁷⁾

4. 住民の経済状況

ロダイの住民の経済状況を知るための手掛りの一つは、センサスに記された資産額である。1850年には所有する不動産価値、1860年には不動産と動産の価値が記されている。これは自己申告によるものであるため、その信頼度には疑問もあるが、調査官が土地の住民であり、資産額は社会的地位とも結びついているので、税金を恐れて極端に低い額を申告するということはなかったようである。資産額と職業、あるいは居住期間などを比較してみると、ほぼ妥当と思われる結果が得られるので、以下、一応センサスに記された数字により、検討を進める。なお、ここでは世帯主のみを対象とする。⁽¹⁸⁾

まず、1850年と1860年における不動産所有額の分布を、表5に示す。Aには、いく分細かく分布を示し、Bでは無産者、中間層、富裕層の3階層に分け、その数と割合を示した。1850年と1860年のいずれの年度においても、ロダイの住民のほぼ3分の1が無産層で、残り3分の1ずつが、中間、富裕層に属するという状況は変化していない。セネカ郡に白人の定住が開始されたのは1789年であり、ロダイへは1793年に移住者が到着した。したがって開拓が始まって半世紀あまり、最初の移住者の子供の世代が、まだ1850年には40歳代後半で居住している時代であったが、村の階層構成は、ほぼ固定化していたといえる。

不動産の価値額では、いささか具体性を欠くので、ここで農場について見てみると、1850年当時、ロダイの平均農場面積は104エーカー、農場価値は5,460ドル(エーカーあたり52.4ドル)であった。1860年には103エーカー、5,720ドル(55.6ドル)と、エーカーあたりの価値が、ほんの少し上った以外、あまり変化はない。表5のAを見ると、5,000ドルから9,999ドルのグループが両年度とも最多数をしめているが、農民に関していえば、多分このあたりが、平均的な存在であったといえるであろう。農民以外については、こうした手掛りはないが、ここで職業と資産額との関係を見てみよう。表6は、表5のBの3階層分けを利用し、職業別に人数と割合を示している。専門職と商業と

(17) ニューヨーク州における農民の移住については、かつて論じたことがある。岡田泰男『フロンティアと開拓者』(東京大学出版会、1994年)第3章。また、下記を見よ。Roberta G. B. Miller, "City and Hinterland: The Relationship between Urban Growth and Regional Development in Nineteenth-Century New York." Ph. D. diss., University of Minnesota, 1973.

(18) 富の分布を知るためには、本来はTax Listによる方がよい。Tax Listは郡の役所(County Courthouse)に保存されており、氏名のアルファベット順に、地番、エーカー、不動産価値、動産価値、税金の額が記されている。ただし、無産者についてはTax Listでは分からないので、本稿ではセンサスの史料によっている。

表5 不動産所有額の分布

A		世帯主数	
価値(ドル)		1850	1860
0		142	132
1— 499		53	36
500— 999		26	38
1,000—1,999		33	32
2,000—2,999		27	35
3,000—3,999		28	26
4,000—4,999		23	30
5,000—9,999		65	67
10,000以上		30	32
計		427	428

B			
0	(無産)	142 (33.3%)	132 (30.8%)
1—2,999	(中間)	139 (32.5)	141 (32.9)
3,000以上	(富裕)	146 (34.2)	155 (36.3)
計		427 (100.0)	428 (100.0)

表6 職業と資産額* (1850年)

	無産 (0ドル)	中間 (1—2,999ドル)	富裕 (3,000ドル以上)	計
農 民	18 (9.2%)	46 (23.5%)	132 (67.3%)	192 (100.0)
労働者	72 (69.9)	31 (30.1)	0 (0)	103 (100.0)
専門・商業	8 (33.3)	9 (37.5)	7 (29.2)	24 (100.0)
手工業	26 (35.6)	44 (60.3)	3 (4.1)	73 (100.0)
無 職	18 (58.1)	9 (29.0)	4 (12.9)	31 (100.0)
計	142 (33.3)	139 (32.5)	146 (34.2)	427 (100.0)

* 不動産のみ

は、数が少ないのでまとめてある。

まず農民のうち、最多数で3分の2をしめるのは、3,000ドル以上の不動産を所有する富裕層であり、その次は3,000ドル以下の中間層が4分の1弱、無産者は10%弱にすぎない。これと対照的なのは労働者で、3分の2以上が無産者、3分の1弱は中間層であり、富裕層には1人もいない。専門職と商業では中間層が多いが、3つの層に、ほぼ等しく存在する。手工業者は、労働者よりは豊かで、中間層が3分の2弱だが、無産者が3分の1強で、富裕層はほとんどいない。最後に無職の場合、無産者が多いが、富裕層にも存在する。これは農家の未亡人と考えてよい。前にも名をあげたエリザベス・ホルシーは、無職の未亡人だが、10,500ドルの不動産を有し、ロダイの中でも、最も豊かな住民の1人であった。また83歳の女性マーガレット・フーフーズは、多分、娘のエレ

ン（53歳）と2人暮らしで、無職、無産ではあったが、隣り（センサスの家屋番号による）に、6,600ドルの農場を持つステファン・フーフーズ（46歳）という農民が住んでいたし、他にも同姓の者が何名も存在していたから、生活に困ることはなかったであろう。

表6によって明らかなのは、ロダイでは最も豊かなのは農民であったことである。事実、表5-Aの10,000ドル以上の資産を持つ30名の内、農民が28名をしめ、専門職や商業従事者には1名もない。他の2名は無職の者である。もちろん、1850年の数字は不動産のみであり、1860年のセンサスでは動産の額も含まれているので、状況は異なるかもしれないと思われる。そこで、1860年について不動産および動産の合計額が10,000ドルを越えた者を拾い出してみると、計42名で、その内37名は農民、専門職1名、商業4名となっており、全体的状況はあまり変わらない。したがって、農民が最上層をしめていたことは確かである。その次に専門職と商業があり、次に手工業者がくる。そして最下層は労働者であって、その70%近くは無産者であった。なお、1860年、動産を加えても、労働者101名中60名が無産者であった。

ここで、有産者についてのみ、平均資産額を計算すると、1850年の場合、農民5,874ドル、専門職3,107ドル、商業1,850ドル、手工業者952ドル、労働者310ドルとなる。1860年について、やはり有産者のみの、不動産と動産を合計した平均は、農民6,179ドル、商業4,599ドル、専門職4,075ドル、手工業者1,138ドル、労働者401ドルとなっている。なお、1860年、動産についてのみ注目すると、平均所有額（所有者のみ）は商業2,150ドル、専門職1,345ドル、農民1,119ドル、手工業者530ドル、労働者219ドルとなり、商業従事者や専門職が優位に立つ。農民の富の中心が農場の土地と建物であったことは当然であろう。

ところで、農民は一般的に豊かなグループに属すとはいえ、その中に貧富の差はある。こうした貧富の差をもたらす原因は何か。アメリカにおいて、人口センサス史料を利用して農村構造を研究した先駆者の1人はミルドレッド・スローンであった。彼女は19世紀中葉のアイオワについての研究で、人口移動と資産との関係に注目し、移動せずに定着している住民ほど富裕であることを見出した。この発見は、その後、中西部のみならず、東部についての研究でも、同じことを見出されている。1850年当時のセネカ郡の農業についての同時代の記述であるデラフィールドの文章（前出）にも、古くからの住民の農場の価値は開墾当初に比べ何十倍にもなっているが、この資産の増加は永年の勤労の結果だという一節がある。この点をロダイについても検討してみよう。⁽¹⁹⁾

1860年のロダイの428世帯について、まず、その世帯主が、いつからロダイにいたかを調べてみる。ただし実際には、どの年度のセンサスから記録されているか、ということになる。ロダイは

(19) Mildred Throne, "A Population Study of an Iowa County in 1850," *Iowa Journal of History* 57 (1959): 305-330; Hal S. Barron, *Those Who Stayed Behind: Rural Society in Nineteenth-Century New England* (Cambridge, 1984), 78-111; Delafield, "General View," 390-91.

1826年にタウンとなったので、最初のセンサスは1830年のものである。1830年と40年のセンサスは、すでに述べた通り世帯主の氏名しか記入されておらず、1850年以降、全員の氏名が記されている。428名の世帯主を分類すると、次のようになる。

1830年より世帯主として居住	36名
1840年より世帯主	71名
1850年より世帯主	105名
1850年に非世帯主	71名
1860年に初出	145名
計	428名

以上の如く、30年以上、世帯主としてロダイに居住していた者が36名おり、彼らは最も古参の住民といえる。他方、1860年に、はじめて世帯主として記録されているのは216名であるが、そのうち71名は、1850年センサスに非世帯主として記録がある。71名中、10名は妻、50名は世帯主と同じ姓の息子か親族、11名は姓の異なる同居人であった。彼らは夫または親が死亡したり、自ら独立したりした結果、1860年には世帯主となったのであり、同年初めてセンサスに記録のある145名とは事情が異なる。これらの5グループの財産額を示したのが表7である。先の表6は1850年の数字であり、不動産のみなので、3,000ドル以上の層を富裕層としたが、表7（1860年）では不動産と動産の額が含まれているので、4,000ドル以上を富裕層とした。同年、平均動産所有額（所有者のみ）は964ドルであった。

表7によって明らかな通り、ロダイに永年居住している世帯主ほど富裕層に含まれる割合が多く、移住してきたばかりの者は中間もしくは無産層である。1860年に、世帯主としては初めて記録されていても、非世帯主として1850年に居住していたグループは、初移住者に比べれば、中間、富裕層が多い。ここで財産所有者についての平均財産額を見ると、1830年からのグループは8,254ドル、1840年グループは6,452ドル、1850年グループは4,016ドル、1850年非世帯主グループは3,326ドル、1860年グループは2,861ドル、全体の平均は4,484ドルとなっている。定着している年数が長いほど、

表7 居住年数と財産額*（1860年）

	無産 (0ドル)	中間 (1-3,999ドル)	富裕 (4,000ドル以上)	計
1830～	1 (2.8%)	8 (22.2%)	27 (75.0%)	36 (100.0)
1840～	6 (8.5)	29 (40.8)	36 (50.7)	71 (100.0)
1850～	9 (8.6)	58 (55.2)	38 (36.2)	105 (100.0)
1850(非)～	13 (18.3)	36 (50.7)	22 (31.0)	71 (100.0)
1860～	54 (37.2)	65 (44.9)	26 (17.9)	145 (100.0)
計	83 (19.4)	196 (45.8)	149 (34.8)	428 (100.0)

* 不動産と動産

表 8 職業と居住年数 (1860年)

	世帯主数	10年以上居住*
農 民	222 (100.0%)	171 (77.0%)
勞 働 者	101 (100.0)	41 (40.6)
専門・商業	28 (100.0)	17 (60.7)
手 工 業	67 (100.0)	49 (73.1)
無 職	10 (100.0)	5 (50.0)
計	428 (100.0)	283 (66.1)

*非世帯主としての居住を含む

資産を増やし、さらに地価上昇の恩恵を受ける機会に恵まれるのは当然であり、アメリカの各地域で見られた状況は、ロダイにも存在していたといえる。

ところで、居住年限の長さは、職業とも関係があるに違いない。事実、表7の、1830年グループ36名のうち、30名(83.3%)は農民であったし、1840年グループの71名中、52名(73.2%)がやはり農民であった。ここで、1860年のロダイの世帯主を職業別に分け、そのうち、10年以上、世帯主もしくは非世帯主としてロダイに居住していた者の数と割合を表8に示す。農民は77%。手工業者は73%、専門職と商業では61%が10年以上、ロダイに定着していたが、労働者は41%と半数以下である。当時のアメリカの労働者が流動的であったことは都市について確かめられているが、農村においても、同じことがいえるかもしれない。手工業者の定着率が高いのはいさ意外でもあるが、彼らの中には不動産所有者が多い。表6に示したように、1850年に、すでに65%の者が不動産を所有していたし、1860年には70%の者が不動産所有者であった。労働者は30% (1850年)と27% (1860年)が不動産を持っていたにすぎないので、こうした点から見ても両者は異なる存在であった。不動産を持つことが、定着の1つの要件であったとも考えられる。⁽²⁰⁾

5. 世帯規模と家族構成

次にロダイにおける世帯の規模や構成について観察しよう。ここでの関心の的は、大家族から小家族への変化があったかとか、核家族が一般的だったか、というようなことではない。かつて家族史研究者が盛んに論じた上記の問題には、一応の結論が出ているので、更めてその確認をする必要はあるまい。⁽²¹⁾むしろ、農村経済における家族の意義といった問題に焦点をあてたい。

アメリカにおける大家族は、わが国の江戸時代のそれと異なり、単に子供の数が多いということである。これは農村において、男の子のみならず、女子も労働力として役に立ったこと、土地が豊富であったので、子供が成人してから自立しやすかったこと、による。したがって、東部では都市

(20) 職業と定着率との関係は、注(19)のハル・バロンも論じている。

表9 ロダイの世帯規模 (1850年)

	農 民	非 農 民	全 体
人数			
1	0 (0 %)	6 (2.6%)	6 (1.4%)
2—4	61 (34.1)	106 (45.9)	167 (39.1)
5—7	84 (42.8)	98 (42.4)	182 (42.6)
8+	51 (26.1)	21 (9.1)	72 (16.9)
計	196 (100.0)	231 (100.0)	427 (100.0)

化が進み、土地の価格が上昇するにつれ、子供の数は減少する傾向があった。19世紀中葉のニューヨーク州では、すでに、そうした傾向が明らかになっていた。まず、1850年のロダイにおける世帯規模を、農民とそれ以外の者とに分けて見てみよう。(表9)

ロダイの427世帯の全体を見ると、5—7人の規模のものが最も多く、43%強である。続いて2—4人の規模が、39%強であり、この2グループで8割強をしめている。8人以上のものは17%弱であり、1人の世帯はほとんど取るにたらない。ところで、農民と非農民とを分けてみると、農民では5—7人の世帯が一番多いのに、非農民では2—4人が最多である。しかも、8人以上の世帯が農民では26%であるのに、非農民では9%にすぎない。結局、ロダイにおいても、農業に従事する世帯は、人手を必要とするので、それ以外の職業の者より世帯規模が大きいといえる。もっとも、世帯規模の大きさが、子供の数を示しているか否かは分からないので、今度は世帯の内容を検討しよう。

ロダイの世帯には、1. 単身者もしくは家族をなしていないもの(独身者の同居等)、2. 単純家族(夫婦と子供)、3. 拡大家族があり、拡大家族の中には、a. 単純家族に同居人が加わったもの、b. 二組の夫婦もしくは三代、あるいは親族の加わっているものがある。これに同居人が加わることもある。なお、同居人とは、世帯主と名字が異なっている者であり、住込みの労働者などである。同じ名字の者で、年齢から見て夫婦の子供でない者が存在する場合は3 bに含まれる。表10に示したように、全体として、単純家族もしくは核家族が一番多く、ほぼ半数をしめている。これに労働者や奉公人を含む拡大家族の(a)を加えれば、8割以上がそれにあたる。そして、より複雑な構成の、拡大家族の(b)は12%強にすぎない。なお、単身世帯15のうち、10は女性が世帯主であり、10名とも無職であるから、多分、彼女達は農民その他の未亡人であったろう。

なお、55世帯からなる拡大家族(b)のうち、単身の親が息子夫婦と同居している例が17、片親

(21) 農村経済における家族の問題については、注(5)にあげたパーカーソンや、マクマレーの書物が詳しく取り上げている。パーカーソンは、市場指向的な農民の世帯は、そうでない農民に比べ、若い男性の親類か、親類でない同居人を含んでいることが多いことを述べている。Parkerson, *Agricultural Transition*, 127-141. 一方、マクマレーの研究は、酪農業を中心としているので、家族の中での女性の役割について分析している。

表10 ロダイの世帯構成（1850年）

	農 民	非 農 民	全 体
単身世帯	0 (0 %)	15 (6.5%)	15 (3.5%)
単純世帯	78 (39.8)	140 (60.6)	218 (51.1)
拡大家族			
a. 単純+同居人	82 (41.8)	57 (24.7)	139 (32.6)
b. 三世代等	36 (18.4)	19 (8.2)	55 (12.4)
計	196 (100.0)	231 (100.0)	427 (100.0)

が、息子夫婦及びその兄弟と同居しているものが5例ある。老人夫婦の場合、とくに夫が先に死亡した際、残された妻がどう生きていくかについては、ここでは利用しなかったが、遺産相続に関する史料の中に、さまざまな取りきめがなされている。多くの場合、残された妻は農地の一部を受取り、息子夫婦が世話をみることになっていたのであり、片親と住んでいる息子夫婦がいるのは、そのためであろう。また、農民の経済状況を記した際にふれたように、単身世帯であっても、ごく近くに親族の者が住んでいる例は多い。また、両親とも健在であるが、息子夫婦と同居しているのは9組あり、そのうち4組は親が世帯主、5組は息子が世帯主になっている。後者の場合、親は引退したものと見られる。⁽²²⁾

ここで、農民と非農民の比較に戻る。表10において注目されるのは、非農民の場合には単純家族が支配的であるのに、農民の場合、世帯主と姓が異なる同居人がいる拡大家族の方が多くことである。また、三世代等を含むものも農民の方が多い。親族にせよ他人にせよ、農民の場合には、純粋な家族メンバー以外の者を含む世帯が多いのであって、そのことが、彼等の世帯規模を大きくしていることが分かる。アメリカの農業の中心は家族農場（家族労働力による農場）といわれ、19世紀中葉の東部農業にも、それがあてはまるといわれている。しかし、実際には、家族労働力以外にも頼る農家が多かったことを、ロダイの例は示している。この点を、もう少し明らかにするため、同居人という存在に目をむけてみよう。(表11)

1850年のロダイには、世帯主と姓の異なる同居人が、計314名存在した。もちろん、妻の親族がこの中に含まれている可能性は存在するが、その点は確かめられないので、すべて同居人としておく。同居人の性別と年齢は表に示した通りであるが、男性187名、女性127名と男性の方が多い。年齢層では、男性女性とも、15—29歳の者が最も多く、男女合計169名で、全同居人の半数以上をしめる。次いで14歳以下の者が多いが、これには親が死亡して他人の家へ預けられた者や、奉公に出

(22) 相続の問題については、注(19)のハル・パロンの研究が扱っている。なお、中西部のドイツ移民を主たる対象としたものであるが、次の論文が興味深い。Kathleen N. Conzen, "Peasant Pioneers: Generational Succession among German Farmers in Frontier Minnesota," in Steven Hahn and Jonathan Prude, eds., *The Countryside in the Age of Capitalist Transformation* (Chapel Hill, 1985) 259-292.

表11 ロダイの同居人 (1850年)

同居人 性別・年齢	世帯主		計
	農 民	非 農 民	
男性			
—14歳	31 (0)*	19 (1)*	50 (1)*
15—29	75 (52)	37 (20)	112 (72)
30—49	7 (5)	5 (4)	12 (9)
50+	8 (2)	5 (3)	13 (5)
小計	121 (59)	66 (28)	187 (87)
女性			
—14	23 (1)	20 (1)	43 (2)
15—29	39 (6)	18 (2)	57 (8)
30—49	6 (0)	6 (0)	12 (0)
50+	7 (2)	8 (0)	15 (2)
小 計	75 (9)	52 (3)	127 (12)
合計	196 (68)	118 (31)	314 (99)

* () は職業が労働者と記されている者の数

された者が含まれている。30—49歳という年齢層は男女とも最も少ないが、これは世帯主や主婦になっている場合が多い年齢だからであろう。50歳以上の中には、老齢のため、知り合いや娘の家に引きとられた者も多分含まれているであろう。

同居人といっても、子供や老人のように、世帯主に扶養されている者もいるが、大半は労働力を提供する存在と考えられる。同居人の中には、職業を労働者と記されている者が存在するので、その数を表11に示しておいた。世帯主が農民である場合、男性の同居人で、とくに15—29歳の層では、75名中52名が職業を労働者としていることが目立つ。彼等が住み込みの農業労働者であったことは、ほぼ明らかであろう。もちろん、農民以外の世帯にも労働者と記された同居人は存在するが、全体として農民の世帯にそれが多し。また、女性の場合、職業は記入していなくとも、家事労働や乳牛の世話、バター製造などの手助けはできたものと思われる。表10に示したようにロダイの総世帯中、農民の世帯は196、その他は231であった。世帯あたりの同居人数では、農民は1人、農民以外は0.5人となり、農民の家に同居人が多かったことが分かる。

もっとも、同居人のいる農民の世帯は、表10の拡大家族118のうち、102世帯である。(b. 三世代等の中にも同居人を含むものはある。)そこで、どんな農民が同居人をおいていたかを、財産額から見てみよう。先に表6において、1850年のロダイの世帯を、無産、中間、富裕の3階層に分けた。不動産所有額が0の者は無産、2,999ドル以下を中間、3,000ドル以上を富裕とした。同居人のいる農民の世帯は、無産9、中間17、富裕76であって、富裕層に集中している。豊かな農民は、もちろん子供や老人を扶養することもできたが、それと同時に、他人の労働力を必要としたといえるであ
(23)
ろう。

6. 年齢と出生地

次にロダイの世帯主の年齢と出生地を見ておこう。表12に1850年と60年の年齢構成を示す。表11では同居人の年齢に関しては14歳以下のグループをもうけ、50歳以上はまとめたが、世帯主の場合は、29歳以下を最も若い層とした。また、60歳以上の世帯主も多いので、最も年齢が高い層を60歳以上のグループとした。1850年と60年で、ほぼ世帯数が変化していない中で、年齢構成がどう変わったかを検討する。

表12が示すように、この10年間に29歳以下の若い世帯主は76名（17.8%）から62名（14.5%）へ減少している。逆に高年齢層は増加しており、60歳以上が70名（16.4%）から79名（18.5%）となっている。30歳から59歳までの中核の層は、281名（65.8%）と287名（67.0%）であまり変化はない。これを見ると、ロダイの世帯主は、ほぼ同じ人びとが定着しており、全体として年を取ったような印象を受けるが、必ずしもそうではない。先に財産額の分布について述べた際にふれたように、ロダイの人びとは、流動的であったからである。ここでもう一度、世帯主としての定着度を示すと、表13のようになる。

1850年には、世帯主として、初めてセンサスに記録された者は253名であり、1860年にも216名存在する。この中には、非世帯主として、それ以前からロダイに居住していた者もいるが、ともかく

表12 世帯主の年齢

年 齢	1850年	1860年
—29歳	76 (17.8%)	62 (14.5%)
30—39	111	109
40—49	95 (65.8)	95 (67.0)
50—59	75	83
60+	70 (16.4)	79 (18.5)
計	427 (100.0)	428 (100.0)

表13 世帯主の居住年数

	1850年	1860年
初出	253 (59.3%)	216 (50.5%)
10年前より	111 (26.0)	105 (24.5)
20年前より	63 (14.7)	71 (16.6)
30年前より	—	36 (8.4)
計	427 (100.0)	428 (100.0)

(23) アメリカにおける家族史について、次を見よ。久田由佳子「アメリカの家族」(清水由文・菰渕緑編『変容する世界の家族』ナカニシヤ出版、1999年、所収)。

世帯主の半数以上は、新しく、そうなった人びとだった。もちろん、1850年と60年を比較すれば、20年、30年前から世帯主であった人びとの数も割合も増加しているの、確かに、同じ人びとが定着していて、全体として高齢化したという面もある。しかし、1860年においても、まだ世帯主の半数以上が初出であったことが注目される。ただ、その年度に初出のグループの数と割合が、かなり減少したことも事実であり、このことが、世帯主の高齢化に一役買ったといえる。

出生地について、1850年のセンサスでは州名のみしか記入されていないが、60年にはニューヨーク州生まれの者については、郡名も記入されている。移住という、カリフォルニアやオレゴンへの幌馬車隊が思いおこされるが、実際には短距離移住が多く、ニューヨーク州内での移動も多かった。したがって、表14には、1860年の数字をあげた。参考のため1850年について記すとニューヨーク州生まれ、275名 (64.4%)、他州135名 (31.6%)、外国が17名 (4.0%) となっていた。なお、他州の中では、ニュージャージー州が80名と最も多いが、これは初期のセネカ郡への移住者に、南側のニュージャージー州から来た者が多かったためである。

表14では、出生地と共に職業を示した。まず、全体として見ると、428名中、181名 (42.3%) がセネカ郡生まれであり、他郡も加えれば293名 (68.5%) がニューヨーク州生まれである。他州95名 (22.2%) の中では、1850年と同じく、ニュージャージー州生まれが64名で最も多い。外国生まれは40名 (9.3%) にすぎず、当時、ニューヨーク市の人口の半数が外国移民であったことを考えると、同じニューヨークといっても都市と農村では大きな相違があったことが分かる。ロダイの外国生まれの世帯主中29名はアイルランド、9名はイングランド、他1名ずつがカナダとドイツであった。ロダイは、その地域に生まれた者がほとんどをしめる農村であったといえよう。⁽²⁴⁾

次に職業との関係を見ると、セネカ郡生まれの者が多いのは、農民 (50.5%) と商業 (46.7%) であって、労働者 (35.6%)、専門職 (30.8%)、手工業 (28.4%) は3分の1かそれ以下である。資産が多く、居住年数も多い農民には、同じ郡、ということは多分ロダイに生まれた者が多かったに

表14 出生地と職業 (1860年)

	ニューヨーク州		他 州	外 国	計
	セネカ郡	他 郡			
農 民	112	53	48	9	222
労 働 者	36	18	18	29	101
専 門 職	4	5	4	0	13
商 業	7	1	7	0	15
手 工 業	19	32	14	2	67
無 職	3	3	4	0	10
計	181	112	95	40	428

(24) バッファローのような地方都市でも、外国移民は多かった。David A. Gerber, *The Making of an American Pluralism: Buffalo, New York, 1825-60* (Urbana, Ill., 1989).

違わない。一方、外国生まれの者40名について見ると、農民9名、労働者29名、手工業者2名となっており、大半が労働者である。彼等のうち、10年以上ロダイに住んでいる者は5名のみで、ほとんどは新来者であった。なお、前節で同居人について述べた。1860年、ロダイには307人の同居人がいたが、そのうち、165人はセネカ郡生まれ、80人はニューヨーク州他郡、24人は他州、37人は外国生まれ、1人が出生地不明であった。外国生まれでは、アイルランド27、イングランド7、スコットランド2、ドイツ1と、やはりアイルランド人が多かった。

7. 社会的移動

19世紀中葉のロダイには、多分、親の代からここに住みついていた農民もいたし、移住して来たばかりの外国移民もいた。住民構成とくに世帯主の年齢や居住年数からいうと、次第に落ち着きのあつた農村になってきたように思われるが、この村の中での社会的移動の可能性は、どの程度存在したであろうか。ここで、職業と資産の両面から変化を見てみることにしよう。⁽²⁵⁾

1850年と1860年の兩年度共、世帯主として職業がセンサスに記録されているのは212名である。この中には、労働者から農民になったもの11名や、同じく労働者から旅館の主人、大工、椅子職人などになった者もいるし、逆に農民から労働者になったり、商人になったりした者もいる。また、おけ工から馬車屋になったり、機械工から特許薬販売人になった者もいる。さまざまな職業の上下関係は、実ははっきりしないが、一応、農民、専門職、商業を上層、手工業者を中層、労働者を下層としておく。無職の者は下層にに入れる。表15は、上の212名について、1850年の職業と1860年の職業が対比できるようにしてある。たての列をたどれば、例えば1850年に農民であった世帯主が、1860年にどの職業についていたかが分かる。すなわち122名の農民のうち、10年後にも農民は115、専門職・商業は1、手工業者1、労働者5という具合である。横の列は、1860年に農民であった132名が、10年前にどの職業についていたかを示す。5人は手工業者、11人は労働者であった。数字の下に下線を引いたものは、1850,60年ともに同じ職業についている人数である。たての列で、下線を引いたものより上方は、社会的に上昇した者、下方は下降した者の数である。

1850年から60年にかけての10年間で、社会的移動が最も激しかったグループは労働者であり、1850年の41名中、22名が職業を変え、そのうち21名は農民等に上昇した。次に手工業者は39名中10名が職業を変え、7名は上昇、3名は下降している。専門職や商業では職業の変化はなかったが、農民の中には労働者等に下降した者も存在する。1850年からの変化をまとめると、全体としては上

(25) 都市における社会的移動（職業移動）については、次が参考になる。Don Harrison Doyle, *The Social Order of a Frontier Community: Jacksonville, Illinois, 1825-70* (Urbana, Ill., 1978); Stuart M. Blumin, *The emergence of the middle class: Social experience in the American city, 1760-1900* (Cambridge, 1989).

表15 職業の変化

		1850年					
		農	専・商	手工	労働	無	計
1860年	農	115	0	5	11	1	132
	専・商	1	8	2	2	0	13
	手工	1	0	29	8	1	39
	労働	5	0	3	19	0	27
	無	0	0	0	1	0	1
	計	122	8	39	41	2	212

昇した者30，下降した者9，変化のない者173であり，社会的移動を経験したのは20%であった。

1850年にロダイにいた労働者（世帯主）は103名であったが，そのうち41名が10年後にも居住し，その半数は農民，手工業者，あるいは商人になることができた。一方，1860年に農民のうち132名が10年前からの居住者であったが，そのうち17名は手工業者や労働者が上昇してきた者であった。これを狭き門というべきか，広き門というべきか。たしかに，西部に移住すれば容易に土地が入手でき，やがてホームステッド法も成立し，無償で公有地が取得できる，というようなことを考えれば，東部農村で農民になるのは狭き門であったろう。しかし，当時のロダイが必ずしも固定的な社会でなかったことは明らかである。

次に資産（不動産のみ）の変化をも見ておく。表16は，1860年から見て，過去10年間に資産が増加したか否かを見たものである。最初に記したように，この間，セネカ郡の農場価値は，エーカーあたり平均51ドルから59ドルに上昇した。ただし，ロダイにおいては，不動産所有者の平均資産額は，4,137ドルから，4,168ドルへと，ほとんど増加していない。ここで表に戻ると，全体では130名（61.3%）の資産が増加し，減少46名（21.7%），変化なし36名（17.0%）をはるかに上廻っている。定着していれば，通常は資産が増大したと見ることができる。もっとも，農民の中にも資産を減少させた者はかなり存在しているので，社会的移動と同様，資産の面からいっても，ロダイの住民は浮き沈みを経験したといつてよいであろう。⁽²⁶⁾

表16 資産の変化 1850-1860年

	増加	減少	変化なし	計
農民	89	27	16	132
専門・商業	7	5	1	13
手工業者	23	6	10	39
労働者	11	7	9	27
無職	0	1	0	1
計	130	46	36	212

(26) これは人口センサスによる分析であるが，農業センサスで農場面積の変化を見ると，増加43.4%，減少22.6%，変化なし34.0%となっている。なお，農場面積の減少が見られた農民のほとんどは，50代，60代の農民であった。

以上、ロダインの世帯主の社会的移動について検討した。最後にロダインの子供達について考察しよう。

8. 子供の将来

19世紀中葉のニューヨーク農村において、子供達はいったい何歳くらいまで親の家に留まっていたのであろうか。すでに記したように、農家では子供の労働力も頼りにしたので、とくに男の子であれば、なるべく引き止めておきたかったに相違ない。しかし、子供の方では、なるべく早く家を出たかったかもしれない。また、農民以外の家では、女の子が工場の女工なり、家事奉公人なりになって、家計の補助をしてくれることを望んだかもしれない。もちろん、娘をなるべく早く結婚させたいと考える親もいたことであろう。さらに、農家であれば、独立した息子が同じ村の中に農場を持つことを望んだに違いない。1850年と60年のセンサスから、子供の状況について何が分かるかを検討する。⁽²⁷⁾

ここでは1850年と60年のセンサスの両方に記録のある212世帯を対象に、1850年に家族の中にいた子供（世帯主と同姓で未婚者）のうち、何名が、1860年の時点でも、同じ家に残っているかを調べる。したがって1850年のセンサス調査以降に誕生した子供（1860年に9歳以下）は考察に入らない。また、1850年に何らかの事情で家におらず、1860年に家に残っている者も対象外である。幼くして他人の家に奉公に出されていたが、10年後には親の家に残っていたという場合であるが、実例はほとんどない。また1850年には家にいて、1860年には存在しない子供の中には、当然死亡した者も含まれる。幼い子供の場合、その例が多いであろうが、実際の数は分からない。10年後にいない者は、移出・死亡者とする。子供は男子と女子とに分け、世帯は農民と非農民に分ける。この職業は1860年のものであり、農民132、非農民80となっている。

1850年、ロダインで親と同居している子供は総数590名、そのうち男子287、女子303であった。親の職業からいうと、農民の子396、農民以外の者の子は194であり、農民世帯での平均的子供数は3.0、それ以外は2.4となっている。農民の方がいく分、子沢山といえる。以下、表17により、子供の移動を見よう。表の左端の年齢は1850年のものである。男子で農民の子供の場合、0—4歳のグループは41人存在した。このグループは10年後の1860年にも41人存在しており、移出・死亡者は0人、したがって移出・死亡率は0%である。しかし、15—19歳のグループを見ると、1850年に34人にいたが、10年後（25—29歳になっている）には5人しか親の家に残っていない。移出・死亡者は29人で、その率は85.3%である。20歳以上のグループは、すでに1850年の段階で、それ以下のグルー

(27) 家にいる子供の問題について、都市の場合であるが、次を見よ。Mary P. Ryan, *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865* (Cambridge, 1981), 165-185.

表17 子供の移動

年齢 (1850年)	A. 男子				B. 女子			
	1850年	1860年	移出・ 死亡者	農民の 移動率	1850年	1860年	移出・ 死亡者	移動率
0—4歳	41	41	0	0 (%)	40	34	6	15.0 (%)
5—9	45	41	4	8.9	46	38	8	17.4
10—14	48	28	20	41.7	42	24	18	42.9
15—19	34	5	29	85.3	44	17	27	61.4
20—24	16	2	14	87.5	15	2	13	86.7
25+	12	6	6	50.0	13	7	6	46.2
計	196	123	73	37.2	200	122	78	39.0
非 農 民 の 子 供								
0—4	37	29	8	21.6	30	24	6	20.0
5—9	22	14	8	36.4	32	20	12	37.5
10—14	13	8	5	38.5	22	7	15	68.2
15—19	13	5	8	61.5	14	5	9	64.3
20—24	4	2	2	50.0	2	0	2	100.0
25+	2	1	1	50.0	3	2	1	33.3
計	91	59	32	35.2	103	58	45	43.7

ブよりは少い。総数196人中28人で、15%に満たない。20—24歳のグループ16人中、10年後、家に残っているのは2名のみである。逆に25歳以上のグループになると、12人中6人が家におり、何らかの理由で結婚せずに親と同居し続けた子供のいたことが分かる。

さて、子供は何歳くらいで親の家を去ったのか、表17によって検討しよう。まず、農家の男子について見ると、彼等は19歳までは、ほぼ家にいる。まだ独立できる年齢ではないし、親の下で労働力として役に立っていた。しかし、20—24歳の年齢層では40%以上が家を去り、25—34歳では90%近くがもはや家を去った。農家の女子はどうか。彼女達の場合には、19歳までに20%弱は家を去っており、結婚もしくは奉公に行ったものと考えてよい。男子に比べれば、家での労働力としての必要度は低いので、こうした結果になったものと思われる。20—24歳では40%、25—29歳では60%、30—34歳では90%近くとなり、順々に結婚して家を出ていったことがうかがえる。

次に非農家の男子はどうか。この場合、19歳までに30%近くが家を去っており、20—29歳までに40～60%が家を出ている。農家に比べ、早くから家を出て、外で稼いでいる子供が多いといえよう。1850年の時点で、家にいる10歳以上の男子数を比べると、農家では1世帯あたり0.83人、非農家では0.40人となっており、農家の方が男の子に対する必要が大きかったため、上の結果が生じたようにも見える。非農家の女子について見ると、19歳までに、男子と同様30%近くが家を去り、20—29歳でほぼ3分の2は家を出ている。年少のうちから、家計援助もしくは口べらしのため家を出たものとも考えられる。1850年に、10歳以上の女子の数は、農家1世帯あたり0.86人、非農家0.51人で

あった。男子の場合より差は少ないが、家で労働需要というより、農家の方が多くの人数を養うことを意味しているのかもしれない。

ところで、19歳以下で家を去っているのは、どんな家の子供であろうか。そうした子供がいたのは農民で16家族、農民以外で21家族であった。これらの家の平均資産額（不動産）を見ると、1850年に農民3,769ドル、農民以外298ドル、全体では1,799ドルであった。同年、ロダイ全村の平均値は、農民5,874ドル、農民以外1,247ドル、全体では4,137ドルであったから、19歳以下で子供が去っていった家は、農家であれ、非農家であれ、平均より貧しい家であったといえる。しかも、上記の家族のうち、農家では4、非農家では11が、不動産を所有していなかった。

もちろん、19歳以下で家を出た子供、とくに女子の場合には、働きにいったのではなく、結婚した者もいたに相違ない。例えばフォーセット家の娘アルマは、1841年生れで、1860年には家にいなかった。しかし父親は16,000ドルの不動産を持つ豊かな農民であったから、多分、彼女は働きに出たのではなく、結婚したのであろう。ただしフォーセット家は例外で、この家を除けば、上記の平均資産額はさらに下り、貧しい家の子供ほど、早く家を出ざるをえなかった。例えば、靴職人のエズラ・ダーリングの家には、1850年に8人の子供がいたが、1860年には、そのうち7人は家を出ていた。ただし、50年代に生れた子供が3人加わっている。また労働者のアンドリュー・コヴァートの家では、1850年にいた子供5人は、1850年にはすべて家を去っていたが、50年代に生れた子供が2人いるという具合であった。

最後に、1850-60年の間に家から出た子供のうち、同じロダイで独立した世帯を持った者について記そう。女子の場合、結婚すると姓が変化してしまうので、村内に留まったかどうかは分らない。(ただし、5名については留まったことが明らかである。) 1850年代に親の家を出た男子の数は、農家の息子が73名、非農家の息子が32名であった。そのうち1860年に新たに世帯主としてロダイに住んでいたのは、農民の息子24名（そのうち20名の職業は農民）、それ以外の息子5名であった。すなわち、農民の息子の約3分の1、それ以外は約16%が、親と同じ村の中で新世帯を持つことができた。これは、とくに農家の親にとっては好都合であったと思われる。農繁期に手助けを期待できたからである。⁽²⁸⁾

さて、子供を同じ村の中で独立させたのは、どんな家であったろうか。1850年について、上の29名の親の資産額（不動産）を見ると、農家の平均は、6,941ドル、非農家1,720ドル、全体では6,041ドルとなっている。先にロダイ全村の平均値を示したが、上記29名の親の家は、農民であれ、それ以外であれ、平均よりは豊かであったことが分かる。したがって、村の中で、子供が新世帯を持てたのは、豊かな家庭であったといえる。独立にあたって親が援助したかどうかは分らないが、当時の東部農村では、しばしば、そうした援助がおこなわれていたから、ロダイも例外ではなかつ

(28) この問題について、Barron, *Those Who Stayed Behind*, 92-106.

たであろう。

以上、ロダイに生れた子供達について述べた。男子か女子か、親は農民か否か、親が豊かか否か、というようなことが、19世紀中葉のニューヨーク農村の子供達のたどる道に、少なからぬ影響を与えたのであった。

9. 結び

19世紀中葉のニューヨーク州セネカ郡ロダイは、人口2,000程度の豊かな農村であった。農村とはいえ、非農業人口も多く、世帯主の中で農民の占める割合は50%前後である。もっとも労働者の大半は農場で雇用されたであろうから、農業従事者が全世帯主の70%以上をしめていたと思われる。そして、鍛冶屋、大工、靴職人などの職人や、商人、医者などが農民にサービスを提供していた。セネカ郡は交通の便に恵まれていたし、ロダイにも馬車屋、倉庫業者、家畜商人などがいたから、もはや市場経済の中にあつたことは明らかである。農場の生産物のどの程度が、村の住民によって消費されたかは不明であるが、小麦やバターの生産量から見ると、かなりが外部へ運ばれたに相違ない。個々の農家にせよ、村全体にせよ、自給自足の時代は過去のものであつた。

当時の北部農村が、南部プランテーション地帯に比較すれば、所得分配は比較的平等で貧富の差が小さかつたことは事実であろう。しかし、貧富の差が存在したこともまた確かである。ロダイの世帯主の約3分の1は、資産を持たぬ無産者、3分の1は中間層、3分の1は富裕層であり、富裕層の大半は農民がしめていた。彼等はまた、永年ロダイに定着している人びとだつた。19世紀のアメリカは人口移動が激かつたことで特徴づけられるが、すでに開拓期を過ぎたロダイにおいても、世帯主のかなりの部分が入れ替つていた。10年以上、ロダイに居住していた世帯主は、農民では8割に近かつたが、労働者では4割程度であつた。そして、非世帯主の中には、ロダイの外へ機会を求めて移出してゆく者が多かつた。

その頃のアメリカは「農民の時代」であり家族農場が支配的であつたといわれている。本稿では、農業経営を直接分析したわけではないが、世帯の規模や構成を通じて、家族農業のあり方を探つてみた。もちろん、ロダイに、かなり多数の労働者が居住していたこと自体が、労働者を雇用する農民の存在を想定させる。さらに、世帯の中に同居人という形で、住み込みの労働者をおいていた農民も多く、とくに富裕な農民にそれが目立つた。したがって、家族農業とはいえ、季節的に、あるいは年間を通じて労働者を雇用していた農民が多かつたことは否定できない。

さて、ロダイの世帯主の6割から7割は、30歳代から50歳代の年齢であり、全体では約4割、農民では半数がセネカ郡生れ、これは多分ロダイ生れということであろう。外国移民はごく僅かであつて、同じニューヨーク州とはいえ、都市とは大きな差がある。もっとも、ロダイ生れの富裕な農民が支配的とはいえ、固定的な農村をイメージするべきではない。すでに人口移動についてふれた

が、社会的移動もある程度は存在し、10年ロダイに居住し続けた世帯主の2割が移動を経験した。資産の増減を経験した者は8割以上である。

ロダイに生れた子供達にとって、故郷はどんな所だったのだろうか。ほとんどの子供は20歳を過ぎると、家を離れていった。もっとも貧しい家の子供は、19歳以前に外へ働きに出ることもあった。他方、豊かな家の子供の中には、家を出て、同じロダイに新世帯をかまえる者もあった。彼等は、何代目かのロダイの住民として、この村の担い手になったのであろう。市場経済がひろがり、都市化や西漸運動が進展する中で、東部農村に残った者を保守的と呼ぶべきか否か、それは分らない。

(経済学部教授)